

報告書

下記の通り講演会を開催しましたので、ご報告申し上げます。

記

1. 名 称 第9回「未来へのことだま」
2. 日 時 令和7年5月19日 16時30分～18時
3. 場 所 オンライン（zoom）
4. 講 師 アグベル株式会社 代表取締役 丸山 桂佑様

5. 内 容

丸山氏は、家業の丸山農園を継承・法人化し、アグベル株式会社を設立した経緯や思い、そして目指す農業の新しい形について講演された。アグベルは2020年に設立され、「アグリカルチャー農業に新時代のベルを鳴らす」という意味が込められている。「世界一のブドウカンパニー」を目指し、生産から流通販売までを垂直統合で行い、グローバル輸出を軸に展開している。

<日本の農業が抱える課題とアグベルのアプローチ>

家樹品目（ブドウなど）は家族経営が主流で法人形態が少なく、植え付けから収益化に時間がかかるため大規模化が進みにくい構造的な課題がある。また、高齢化やビジネス化の遅れも課題となっている。アグベルはこれらの課題に対し、遊休農地や耕作放棄地を賃借・再生することで生産規模を拡大。山梨では小規模経営体の事業承継、茨城では大規模農地の集約と、地域特性に合わせた方法で農地を増やし、10年以内（または7年以内）に100ヘクタールへの規模拡大を目指している。生産技術面では、経験や勘に頼る作業を定量化し、クラウドを活用した生産管理DXを進め、作業進捗や人員配置を可視化・効率化を図っている。

<独自のビジネスモデル>

流通・販売は、従来の市場出荷ではなく全て個別に直接販売している。自社で選果場を運営し、独自の選果基準（形状、穴空き、軸、カラーチャート、粒の大きさなど）を設けて品質管理を徹底。海外・国内の小売店と連携し、消費者ニーズを逆算した生産・パッキングを行っている。近隣の高齢農家向けには集荷トラックを運行し、収穫や箱詰めが難しい農家のブドウを規格外品も含め買い取っており、農地の貸借に繋がる信頼関係構築に繋がっている。

<組織運営と人材育成>

平均年齢 29 歳と若いメンバーが多く、農業経験者だけでなく異業種からのメンバーも活躍。農業法人でありながら、スタートアップと同様の一般的な企業経営（勤怠・経費管理、人事評価制度など）を目指している。ネガティブな「農業だから」という言葉は使わない方針。パーパスは「日本の農業をアップデートし、当たり前の幸せを取り戻す」とし、家族経営から企業経営へ、農業から産業へ、規模拡大を通じて、生産者と生活者の双方の幸せを実現することを目指している。バリューとして「農業を愛する」「常識に囚われない」「チャレンジを楽しむ」などを掲げている。従業員の熱量を維持するため、会社の思いを共有する機会を設けたり、アルバイトにも人事評価制度を導入したりしている。

<今後の展望>

ブドウの生産拡大に加え、グローバルでの需要が高く離農が進んでいるモモの生産にも注力する方針。家樹経営の長期的な性質（30 年先まで見据える必要）を考慮し、利益率や売上成長率を指標に、計画的に規模拡大を進めている。

<質疑応答（抜粋）>

従業員の熱量維持: 半期ごとに思いを伝える会を開催。アルバイトにも人事評価制度を導入し、スキルに応じた昇給制度を提供。

山梨へのこだわり: 山梨に限定せず、家樹が作れる条件があれば全国どこでも挑戦したい。茨城など他産地での生産規模拡大も進めている。

常識に囚われない例: 従来の市場出荷中心の考え方から脱却し、消費者や販売先のニーズから逆算して生産・販売するビジネスモデルを実践していること。

自己研鑽: 経営者として常に事業や会社を考え、未来への投資や行動（英語学習、海外視察など）を実践している。

農業の魅力: 消費者や喜ぶ人が分かりやすく、社会の中で大きな役割を果たしているという使命感を感じる。

6. 所 感

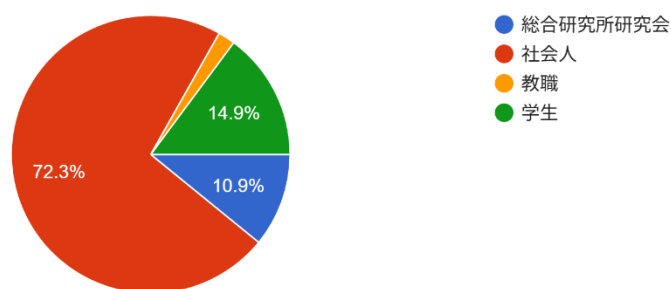
農大愛好会主催となる記念すべき第 9 回「未来へのことだま」の講師にはアグベル株式会社 代表取締役 丸山桂佑氏にご登壇いただきました。

丸山様の講演からは農業経営に対するエネルギーを強く感じました。日本の農業課題に向き合い、遊休農地の活用や生産管理の DX 化、独自の直売モデルで急成長を遂げている点が印象的でした。特に、IT を使ったデータに基づく生産や、従業員や地域の小規模農家を大切にする経営がアグベルの成長の秘訣なのではないかと感じました。地域や生産方法など先代から受け継いだ既存の資源をうまく活

用しながら生産量を増やし、農業法人として挑戦し続ける丸山様の姿に非常に感銘を受けました。

7. 参加者について

今回は、総勢 101 名のエントリー。参加者の内訳としては、前回に引き続き社会人の割合が最も高く、全体の 72.3%を占めた。今回ご講演いただいた丸山桂佑様は、「産業の新たなインフラ」を目指し、ぶどうの生産に取り組まれており、2022 年には農林水産大臣賞を受賞、2024 年にはフラッグシップ産地として認定されるなど、輝かしい功績を残されている。こうしたご経歴もあり、今回は農業関連企業からの参加が多く見受けられた。一方で、前回同様に学生の参加率が低い点は課題として残った。将来的に経営者を志す学生に対して、本講演会の存在をより効果的に周知する方法を工夫し、より多くの学生にご参加いただけるよう努めていきたい。また第 10 回の開催に向けても、より有意義なセミナーとなるよう、引き続き準備を進めていきたい



最後に、本講演会開催に漕ぎつけることが出来たのは経営者会議様のご厚意、ご支援のおかげであります。改めまして心より感謝申し上げます。

以上